

# 島原の乱でただ一人生き残った男・

絵師山田右衛門作えもさくの生涯（08・6・21）

家木 裕隆（昭22・理）

## はじめに

寛永十四年（一六三七）十月二十五日、島原、天草で起った領主の苛政とキリシタンの弾圧に反抗する農民一揆は、幕府に不満を抱く浪人たちも加わって数万人の規模となりました。一揆勢は原城に立てこもり、幕府軍との激しい攻防戦で寛永十五年正月には上使板倉重昌が戦死しました。

重ねて上使に任命された松平信綱は十二万の幕府軍に厳しい包圍網を布かせ、力攻めを避け、兵糧攻めに徹しました。一揆勢の弱つたのを見て二月二十七日～二十八日に総攻撃を仕掛け、三万七千人いたといわれる一揆勢を女子供に至るまで皆殺しにしました。

その中でたった一人生き残ったのが今日お話しする絵師・山田右衛門作えもさくなのです。

## 天草四郎陣中旗

まずは図版「天草四郎陣中旗」をよくご覧下さい。この旗は四か月に及ぶ天草・島原の乱で一揆勢の団結の象徴として崇められていた陣中旗です。よくよく見ると右半分には弾丸の貫通した孔や血痕らしいものも残っています。旗は縦横ともに一〇八・六センチの正方形の綸子の布製で、卍字くずしに菊の花の地模様があります。元来はキリシタンの儀式用に作られたものかもしれませんが。

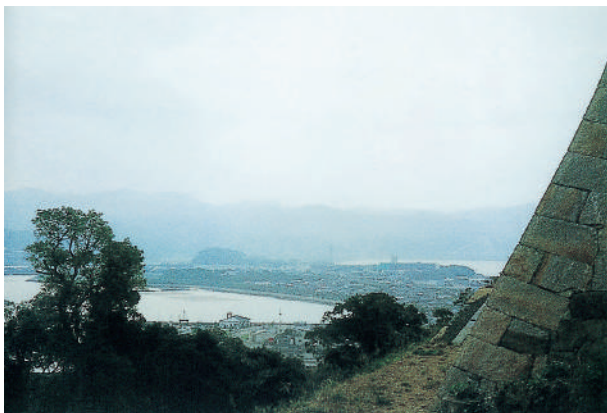
中央には葡萄酒を満たしたカリス（聖杯）とその上に十字の上が短く下が長いラテンクルス（羅典十字架）を付けたオスチア（聖餅）が描かれております。これはイエス・キリストがゴルゴダの丘で処刑される前夜の最後の晩餐で弟子たちに「取って食べよ、これはわたしのからだである」と言って与えたパンであり、キリストの聖体とされています。

なお図版では見えにくいのですが、クルスの最上部には横書きで「INRI」の四文字が入っております。これは「Jesus Nazarenius Rex Iudaeorum（ゆだやびとの王ナザレのイエス）」の頭文字でクルスの付いたオスチアがキリストの聖体であることを裏付けております。

こうなると気になるのが旗の上部の文字ですが、これは古ポルトガル語（フテン語によく似ている）の LOVVADO SEIA O SANCTISSIMO SACRAMENTO と記されています。ラ



天草四郎陣中旗  
国の重要文化財指定  
(天草市立天草キリシタン館所蔵)



富岡城趾 一揆勢は二の丸まで攻め入ったが、写真右に見える本丸は遂に落とせなかった。



原城趾 南西海岸から本丸跡を望む。東・南・西は海に聳える断崖である。

バードは「讃仰する」の過去分詞、セシアは「在る」の接続法（ドイツ語の SEIN に似てる）で、才は定冠詞、サンティッシモは「最も尊い」（尊いという形容詞の最上級）、サクラメントは「秘蹟」という名詞です。全体の意味は「いとも尊き聖体の秘蹟ほめ尊まれ給え（文化庁訳）」といわれております。（天草切支丹館資料『聖旗天草四郎陣中旗の解題』による）寛永十五年二月二十八日、原城落城の日、天草四郎時貞のいる本丸へ攻め込んだ佐賀藩の鍋島大膳がこの旗を奪いました。その功を嘉して主君鍋島勝茂から旗を授与され、大膳の子孫に伝えられていましたが、戦後アメリカへ持去られそうになった時、心ある人々の尽力でようやくこれを免かれ、昭和三十九年一月、国の重要文化財に指定されました。

その後は個人の所蔵となっていました。その方の好意で昭和五十三年十二月二十七日天草切支丹館に寄託され、大切に保管されております。

陣中旗をよく見ると聖杯やその両脇でアンジヨという羽をつけ合掌礼拝している天使たちの陰影法は明らかに西洋画の技法で、それもなみなみならぬ油彩画の技倆と素描力を持った人の作であることがわかります。

その作者が山田右衛門作であるという説が最も有力なのです。

## 山田右衛門作の生い立ち

山田右衛門作についてはさまざまな記録がありどれが正しいのか明らかでなく、謎に包まれた部分もあります。

たとえば吉川弘文館の『国史大辞典』には「生没年不詳。江戸時代前期の洋風画家。明暦元年（一六五五）歿説がある。」と記されております。また『島原一揆西戎征伐記』と題する写本が後年発見されましたが、それによれば右衛門作は出雲の尼子勝久の子孫で、流浪の末肥前の国に隠れ住んだとされております。そうかと思えば『天草征伐記』によれば「元来天草の島上津の地主名主にて、大村の長として大福者にして学問道德の男、文章の達者」と記されていきます。『原城記事』では長崎生れで西洋画をよくし、松倉氏に仕え口之津村に住んだことになっており、まさに諸説紛々というところ です。

このような資料の山の中に一つ注目すべき記録があります。今倉真理氏の『天草四郎時貞 真実の預言者』の中で「一五八八年のセミノリヨ（神学校）の名簿のなかに、山田と名乗る生徒が三人いるのだが、リノ山田（十六歳）というのが嶋原出身となっている。その頃セミノリヨ（第二次有馬セミノリヨ）では八名が油絵を習って非常に上達し、色も形も原画さながら」と一五九三年のペドロ・ゴメスの報告にある。島原の有馬氏に仕えて

いた山田右衛門作がこのリノ山田である可能性は非常に高いといえる。」とされておられます。この記述は非常に信憑性は高いと思われまます。

もしこれが正しければ山田右衛門作は一五八八年に十六歳でしたから一五七二年（元龜三年）年に生れ、当時島原の領主であった有馬氏に仕え、セミナリヨでイエズス会の神父から南蛮絵（西洋画）の技法を習得し、高い評価を得るに至ったものと思われまます。

慶長十九年（一六一四）六月（大坂冬の陣の四か月前）領主有馬直純が日向のあがた県城へ移封される前、二年前に発せられたキリシタン禁教令に従って棄教し、キリシタン迫害を強化しました。この時山田右衛門作を含め多くの家臣が日向に移らず有馬に残りました。

その後島原の新しい城主となった松倉重政も口之津に住む山田右衛門作をお抱え絵師としました。この意味で先に引用した『原城記事』の記事も誤りではないことになりました。島原の乱で九死に一生を得た右衛門作が『国史大辞典』の記載のとおり明暦元年（一六五五）に亡くなったとすれば享年八十三歳となり、他の資料とほぼ合致します。

ここで付け加えたいのは島原の乱で原城に籠城したとき、天草四郎直属の親衛隊五百の指揮を委せられたことでもお分かりのように、山田右衛門作は単なる絵師ではなく、『天草征伐記』の記述にもあったように「学問道徳の男、文章の達者」でもあったと思われまます。落城後捕われてからの供述書である『山田右衛門作口書写』でもそれが偲ばれます。

## 天草・島原の乱はどうして起ったのか。

まず挙げられるのは宗教的原因です。信長、秀吉、家康はいずれも南蛮文化の吸収、交易（特に鉄砲・大砲の購入）のため、時にはキリスト教の布教を許しながら、キリシタン勢力の急速な増大とその奥にある領土的野心を警戒し、厳しい取締りと緩和を繰返してきました。特に先にお話しした慶長十七年（一六一二）の全面的な禁教令以後は極めて厳しくなり、松倉氏の領地になってからの島原では棄教を迫っても応じない信者には熱湯を浴びせかけるなど一段と凄まじい迫害が行われました。

これに加えて領主の悪政と重税が領民を極限まで苦しめておりました。中でも酷かったのが島原城の松倉重政です。重政はもと大和国五条で一万石の領主でしたが、大坂夏の陣での武功により元和二年（一六一六）肥前国高来郡ひのえ野江城（二年前の慶長十九年まで有馬直純のいた城で原城のすぐ北にある）四万石に増されました。

重政は大変な野心家で、まず格式を上げるため今の島原城の地に東西三三八〇メートル、南北一三二〇メートルの広大な塀を巡らせ、本丸には五層の天守閣、二の丸、三の丸にも櫓を築き、七年あまりかかって十萬石級の壮大な城を完成させました。公儀普請に際しては自ら進んで石高を超える負担を申し出て幕府の心証をよくすることに専念しました。



島原の地はもともと山が多くて田畑が少ないため、四万石という石高は実際は二万石あまりしかなく、領民の負担はただでさえ過重であったのに、領主のこうした支出をまかなうため、考えられないほど苛酷な税負担を強いられました。作物の大半は税として召し上げられた上、家の中に柵をつれば「柵餞」、窓の数により「窓餞」、赤ん坊が生まれると「頭餞」、人が死んで墓穴をほれば「穴餞」と考えられる限りの過酷な税を取り立てました。こうした税を納められないと妻子や老人を人質にとり、常時水に漬かる水牢に閉じ込めて苦しむ様を見せ、それでも納められない者は両手を後ろ手に固く縛って燃えやすい簀を着せて火をつけ、熱さに飛び跳ね、転げ回って焼死する様を「簀おどり」と称して大勢の者に強制的に見せつけました。

一方肥前唐津の藩主寺沢広高は関ヶ原の戦で東軍に加わった功により天草四万石を増され、十二万三千石を領しておりましたが、飛地領の天草は唐津とは海上四十八里を隔てていますので、天草島の西端の要害の地、富岡に城を築き、城代三宅藤兵衛に治めさせていました。三宅藤兵衛は明智光秀の娘婿、左馬助光春の遺児ですから光秀の孫にあたります。武勇にすぐれているばかりか慈悲深く、『四郎乱物語』には百姓が困窮している時には米三百七十石を与えたとの記録もあり、島原のような苛政はなかったようです。

もちろん三宅藤兵衛も禁令のキリシタンについては厳しく取締った筈ですが、天草の領

民が蜂起したのは地理的に一衣帯水の地で姻戚関係も多い島原の領民に対する同情が最も大きな原因であるように思われます。

天草・島原の乱があればほどの大乱となったのはこの地がかつて熱心なキリシタン大名であった小西行長や有馬晴信(あつさりと棄教して日向に移封した有馬直純の父)の旧領で、信仰を棄てかねた遺臣たちが浪人となって大勢いたからです。大部分は雌伏の時を重ねておりましたが、関ヶ原の戦、大坂の陣など実戦経験のある者も生き残っており、戦術・戦術にも長け、特に修羅場における駆引きは幕府軍の若い武士たちを上回ることもありました。さらに天草は天草筒とよばれる銃身が長く、射程距離も長くて命中率のよい鉄砲の生産地で、村々には砲術に長けた浪人を鉄砲頭とした郡筒こわりづつといわれる鉄砲隊もあつたようです。始めは一揆勢をただの農民一揆と侮っていた幕府軍はやがてその威力を思い知らされます。

### 天草四郎の出現を予言した「末鑑すえかみの書」

『耶蘇天誅記』はママコス上人(マルコス・フェラアロ神父と考えられる)が慶長十七年(一六一二)のキリシタン禁教令で追放される時、『末鑑の書』という予言書を残したと伝えています。その内容を略記すると次のようになります。

「今から二十五年の後に十六歳の神の子が現われる。その子は学ばずして諸道に通じ、何一つ出来ないことはない。その時東西の雲は真赤に焼け、地には時ならぬ花が咲く。国中で山野が鳴動し、民家も草木も焼け果てる。人々は首にクルスをかけ野山に白旗がなびき、仏教・神道はキリスト教に呑み込まれ、天帝はあまねく万民を救うであろう。」

結末の部分を除いてはこの予言はよく当っておりす。乱の起る寛永十四年（一六三七）は予言書が慶長十七年（一六一二）に作られたとすればまさしく二十五年後となります。乱の起る直前の寛永十三〜十四年はひどい旱魃で朝焼け、夕焼けが異常であったと伝えられています。日照りで葉を振り落した桜などの木が秋に時ならぬ花を咲かすのはよくあることです。山野鳴動……以下はまさに天草・島原の乱の光景を表しております。

「十六歳の神の子」とは当時十六歳であった天草四郎時貞のことで、誰にも教えてもらわないのに書を読み、諸芸に秀で、古今東西のことに通じた紅顔の美少年であった（一部にはあばた顔であったという説もあります）といわれております。

四郎は小西行長の祐筆であった益田甚兵衛の子で、益田四郎と呼ばれていました。甚兵衛は関ヶ原の戦の後、小西家の旧領天草から宇土に移り、その後長崎に移りました。このころ四郎が生まれました。四郎は幼少の頃から宣教師と接触してキリシタンの教えやラテン語の知識を身につけ、日本・中国の古典など中広い学識を習得したものと思われます。



図 1 原城址周辺図

『徳川実紀』には四郎が「鳩を掌上において掌中に卵を生ませ、その卵の内より天主の経文をいだし、あるは竹にとどまりし雀を枝ながら折つて人に見せ、其身海上をかちわたりす」と数々の奇蹟を見せたことを伝える記述があります。あるいは四郎は南蛮の奇術をよくし、海の干満をよく知つて浅瀬を渡つてみせたのかもしれない。『徳川実紀』はさらに「これぞ天より降せし神童なり。かかる奇瑞をみながらむなくあるべきにあらず。これぞ宗門再興の時なりと愚民を誘引せしかば、これに惑い従ふもの日々月々にそひたり。遂に近郡の村里を煽動して徒党少からずと聞ゆ」として、苛政と迫害に喘ぐ領民の救世主として天草四郎時貞への讃仰と期待が日に日に高まつて行つた有様を伝えています。

## 天草・島原の乱の勃発

天草・島原の領民たちの不満が極限に達し、村々では蜂起の準備も進められていた寛永十四年（一六三七）十月二十五日、決定的な事件が起りました。島原の深江村に左志来<sup>さしき</sup>右衛門という者がいました。ひそかにキリシタンの教えを信じてデウスの画を隠し持つていました。しかし年を経て表具も古び、画も傷みはじめていたので心を痛めていましたが、禁制が厳しく、表具師に頼むこともできないので思い悩んでいました。ところがこの朝起きてみるとその画像が一夜のうちに表装されて奥の間に掛けられていました。

左右衛門は「これは凡人の業ではない。ひとえに天帝の御憐み」と喜んでキリシタンに立ち帰った人々に拜ませました。たちまち村中の評判となつて、この奇蹟の画像を一目見ようと大勢の人が押しかけてきました。

領主松倉勝家の代官、林兵衛門が噂を聞いて駆けつけてみると、近郷から集まった多数の信徒がデウスの画像を拝し、代官の顔を見ても憚るところがありません。激怒した代官はその画像を引き破り、焼き捨ててしまいました。これに激昂した信徒たちは代官に襲いかかりとうとう殺害してしまいました。もはや決起しかありません。島原一円、天草にまで急報し、領民たちはいよいよ鉄砲、武器を取って一斉に蜂起しました。

翌二十六日には一揆勢三千余人が島原城を包囲し、城下を焼き払い、落城寸前というところまで攻め立てました。城方は鉄砲を乱射し、大筒まで発射して辛うじて持ちこたえました。その響きは遠く対岸の肥後まで伝わり、熊本藩の家老長岡監物がこれで乱勃発を知つたと伝えられています。

この少し前、島原半島の先端、口之津の百姓与三佐衛門は未納年貢のかたに臨月になった嫁を水牢に入れられ、嫁は水牢の中で子を産み落し、母子ともに死んでしまいました。これを知つた与三佐衛門は「もはや生きていても詮なし」と頭百姓に相談すると、決起に同心するものが七、八百人も現れました。嫁の実家は天草でしたが、娘の牢死をいかにも無念に思い、天草の頭百姓たちを語らつてキリシタンに立ち帰り、屋敷を焼き払つて一揆勢に馳せ参じたと伝えられています。

深江での代官殺害の起る前日、十月二十四日に天草の大矢野と島原の有馬との中間にある湯島に天草・島原の重立つた者が集まり、天草四郎時貞を大将にして一斉に蜂起することを決めていました。二十六日に数千の一揆勢を集めて島原城を攻撃することができたのはこうした手筈が整っていたからです。この後、湯島は談合島とも呼ばれます。

この頃山田右衛門作はどうしていたのでしょうか。右衛門作は当時口之津におりましたが、意外なことに最初は積極的に乱に加わる気はなかつたようです。右衛門作が後に他藩

の者に宛てて書いた書状によれば「十月二十五日に加津佐の理右衛門が大将となつて私の家を取り巻いて焼き払おうとしたので、いろいろ詫び言してのがれましたが、二十八日には又押し寄せて息子を人質にとりましたので仕方なく乱に加わりました」という事情が明らかになりました。他藩の記録であるだけに信憑性は高いと思われます。（鶴田倉造氏著『天草四郎と島原の乱』より抜粋）この後の幾つかの記録からも右衛門作は強硬派ではなく、何とか事態を收拾しようと苦心した和平派であったことがわかります。しかし現実には厳しく、右衛門作の陣中旗は一揆勢の団結の象徴となり、彼自身も原城の本丸守備の隊長の一人となり、乱は拡大の一途を辿ります。

### 追討使下向・天草の戦い

十月二十六日の島原城の攻防戦で一揆勢の実力を見せつけられた松倉勢はもはや自力では一揆を鎮圧する力はなく、江戸出府中の藩主松倉勝家に急使を立て帰国を促すとともに、九州を統括する豊後目付に報告、近隣各藩に救援を依頼しました。しかし当時の「武家諸法度」では大名の領外への出兵を禁止していましたので、豊後目付は評定の後、幕府に急報してその指示を仰ぐこととしました。国境まで出向いていた近隣諸藩の兵も一旦引揚げ

ざるをえず、鎮圧する者のいなくなつた島原領内では一揆勢が藩の倉庫を襲つて、食糧や銃砲・弾薬を奪い、総勢一万を超え、ますます勢力を増大しました。

乱の知らせが江戸へ届いたのは十一月九日で、直ちに板倉重昌（三河深溝ふかこう一万五千石の領主）が追討使、石谷貞清が副使に任命されました。重昌はこの日申の刻に下命を受け邸へ戻ると、聞きつけた餞別の客が門前市をなす中で素早く出陣の支度を整え、翌日早朝に出発しました。人々は皆日頃の心掛に感服したということです。

幕府は追討使の派遣とともに島原藩主松倉勝家、唐津藩主寺沢堅高と隣藩である佐賀藩鍋島勝茂に帰国を命じるとともに、十一月十四日には熊本藩細川忠利、福岡藩松平（黒田）忠之、延岡（あがた県）藩有馬直純、柳川藩立花宗茂、久留米藩有馬豊氏らにも子弟を帰国させて領内成敗（臨戦準備）させました。これら近隣諸藩を総動員すれば十万を超える追討軍を編成することが可能となります。

天草諸島は島原半島の南にある大小六十余の島々で全部合せると島原半島より面積は大きくなります。前にお話しましたように天草は肥前唐津の城主、寺沢堅高の領地ですが、海上四十八里を隔てていますので、天草下島の西端の富岡に城を築き、三宅藤兵衛重利を城代として天草一円を治めさせていました。



前に少しお話しましたように藤兵衛は明智光秀の娘婿、明智左馬助光春の遺児で、坂本城落城の時、赤子であった藤兵衛は乳母に抱かれて比叡山を越え、八瀬の里へ落ち延びて天満宮の神主に育てられました。その後伯母である細川ガラシャ夫人に引き取られて細川家に仕えました。しかし関ヶ原の戦いの後細川家を去り、縁あって寺沢広高に仕え、引立てられて禄高三千石、富岡城代に出世していました。

三宅藤兵衛の再三再四の要請で唐津から千五百の援軍が到着したのは十一月十日でした。早速天草の一揆勢を攻め始めましたが、天草四郎は十三日、一揆勢五千を率いて天草上津浦に上陸し、十四日早朝、山野に白布、白紙の旗を雲霞のごとくなびかせて攻めかかりました。富岡城から天草上島へ出陣してきた唐津勢は三宅藤兵衛の嫡子藤右衛門を将として兵二百余人、島子に陣を布いていましたが、数十倍の一揆勢に海陸から攻め立てられ、一たまりもなく敗走しました。藤右衛門は辛うじて富岡まで落ち延びましたが、名のある武士の多くが打ち取られました。

天草下島の要衝、本渡には三宅藤兵衛が残兵をまとめて陣を布いていました。関ヶ原、大坂の陣の歴戦の勇将の藤兵衛は一揆の大軍を見て一旦富岡城に引き上げるよう命じましたが、唐津から来た若侍たちは「ご城代は臆されたか」と決戦を主張します。かくなる上はと藤兵衛は全軍を率いて突入し、本渡の町山口川が血に染まるほどの激戦となりました

が、多勢に無勢、唐津勢は総崩れとなりました。

藤兵衛は残兵をまとめて広瀬の天神の森まで落ち延びましたが従う者わずか二十余人、包囲した一揆勢の鉄砲の一斉射撃で壮烈な最期をとげました。

本渡の広瀬にある三宅藤兵衛の墓には今も有縁の人の香華が絶えません。

一揆勢はこの勢に乗じて天草全土を制圧しようとして十九日、一万余人の軍勢で富岡城に攻めかかりました。富岡城は天草下島西端の岬の先端に聳える天然の要塞でしたが、「死せば昇天疑いなく、生きては富岡城主とならん」と一揆勢の士気はますます高く、二十二日には島原からの加勢を加えて一万二千人が手に手に竹束の弾丸よけを持って押し寄せ、たちまち三の丸、二の丸を攻め落とし本丸に迫りました。守る城兵はわずか六百、落城寸前と思われたとき、三宅藤右衛門は父藤兵衛が数百本の火矢を用意していたのを思い出し、矢狭間から一揆勢に射かけました。見る間に竹束の楯に火がついて慌てふためく所へ、強力な天草筒を乱射すると、たちまち一揆勢五百人あまりがばたばたと倒れました。

既にそれまでの攻防でかなりの死傷者が出ていた一揆勢は富岡城攻めを諦め、兵をまとめて退き、天草の戦いは終わりました。

城攻めの難しさをよくよく悟った天草四郎は島原の故城に拠る作戦を固めました。

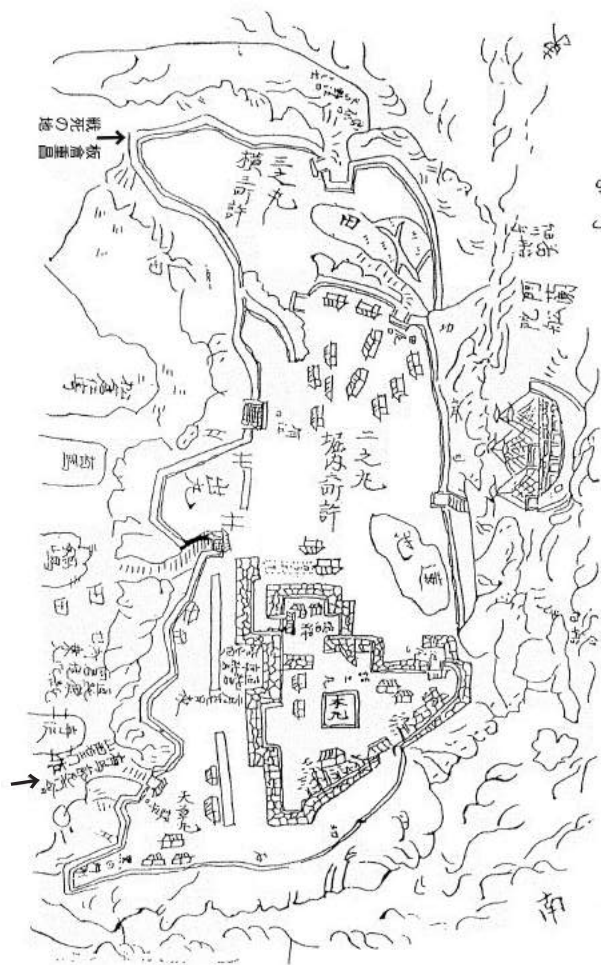


図 2 原城絵図 (藤原有馬世譜より)

(南有馬町文化財調査報告書所載)

## 原城の戦い・上使の討死

同じ十一月二十二日、上使板倉重昌らは小倉に到着、二十七日には九州の諸大名に出兵を命じました。同じ日に幕府は一揆鎮定後の仕置のため老中松平信綱と戸田氏鉄を派遣することを決めました。信綱が九州に着くまでに乱は鎮圧されていると思っていたのです。

この間に一揆軍は十二月一日、原の古城に入り、八日修復を終え堅固な城としました。板倉重昌は五日に島原城に入り、十日には松倉勢、鍋島勢などを率いて原城に攻めかかりますが、城兵に激しく鉄砲を打ちかけられ、多数の死傷者を出して退きます。そのうちに諸将の軍勢も到着、総勢三万余をもつて二十日再び総攻撃をかけましたが、城兵は大石を投げ落とし、鉄砲を打ちかけましたので、搦手の一万五千の鍋島勢は瞬時に三百余人が討死、城兵は手負一人もなしという惨敗でした。大手では立花、松倉勢らが猛攻しましたが、投石、弓、鉄砲で死者の山を築きました。重昌は松倉勢に攻撃を催促しましたが、立花勢に先陣を奪われた松倉勢は動かず、早くも諸藩の兵の足並の乱れが露呈しました。

この中で昔大坂の陣で活躍した真田浪人、村井十郎兵衛父子は山城で餓死寸前まで困窮していましたが、死に花を咲かせようと松倉勢に加わり、一番に塙際まで攻めかかって父子ともに壮烈な戦死を遂げました。

関ヶ原以来、断絶した大名は六十数家、巷に溢れる浪人は数十万人といわれ、一揆勢はその参集を期待していましたが、実際は幕府軍に馳せ参じた者が多かつたようです。

十二月二十九日、大老井伊直孝の書状と、重昌の兄で京都所司代の板倉重宗からの書状が届きました。重昌は諸將を集めました。

「松平信綱殿は正月一日か二日に到着との沙汰あり。再三の城攻めも諸將の呼吸が合わず、不覚の敗北を重ねて今日に至り口惜しい限りでござる。ここで新上使の到着後落城という仕儀とならば、われら何の面目やある。明日は正月元日、城内も油断あるべし。辰の刻より総攻めして一気に攻め落すべし」

諸將も異存なく総攻めが決まりました。

その夜重昌はわが子重矩を呼んで「明日もし余が討死したと聞いても決して血気に逸つてはならぬ。武士は攻めるべきは攻め、退くべきは退く真の勇氣が肝要じゃ」と強く言い聞かせました。乾の烈風の中、日付が変わって元旦となる頃、重昌は辞世を認めました。

「あら玉の年の始に散る花の名のみ残らばさきがけと知れ」

この日大手の三の丸の先陣は久留米の有馬勢と決っていましたが、刻限の辰の刻まで待ち切れず、早朝から攻めかかりました。

寄せ手に内通者がいて予期していた城方は、三の丸の守りに精銳の浮武者（遊軍）一千

を増強し、手ぐすね引いて待ち構えていました。攻撃と同時に大木、大石を雪崩のように投げ下し、弓、鉄砲を篠つく雨のように射ちかけました。たちまち千人あまりも討たれた有馬勢は浮足立って退却します。

後詰の軍勢も辰の刻になって押し寄せましたが、意気上った城兵は再び大木、大石を投げ下して勢いを挫き、鉄砲、弓、槍とあらゆる武器をもつてここを先途と激しく戦いましたので、攻撃軍の死傷者は数知れず、雪崩を打って敗走しました。

重昌はこの不甲斐ない有様を見て歯噛みしながら、自ら馬を走らせて松倉の陣に乗り込み、「ご当家は乱の根源、何故攻めぬか！」と激しく詰りますが、手痛い損害を受けた松倉勢は動こうとしません。抜け駆けに失敗して総攻めを台無しにした有馬勢も督励しますが、既に戦意を失い動く気配もありません。

もはやこれまでと重昌は僅かな手勢を率い、自ら槍を取って突撃します。大将と見た城兵が我も我もと攻めかかる中、今や死兵と化した板倉勢はよく戦って遂に扉に乗り入れようとしました。

その時、城内から投げ下した大石が重昌の兜を砕きました。これに屈せず、最後の死力を奮つてなおも駆け上ろうとする重昌の乳の下に狙い撃ちした鉄砲の弾丸が命中しました。たまたらざうと倒れた重昌を家臣たちが主君の首級を敵に渡すまいと肩に担いで必死

に本陣へ引き返しました。

父重昌の死を知った重矩は下知に従わない諸将への怒りから城近くまで突き進みましたが、郎党たちに諫められ、父の言葉思い出し、突撃を思い止まりました。副使の石谷貞清も負傷しましたが、全軍に退陣の下知を出し、重矩は殿軍を勤めて整然と退き、敵の追撃を許しませんでした。

この日の幕府軍の死傷者は四千余人、城方の死傷者は九十余人と伝えられています。

## 松平信綱の作戦

松平信綱、戸田氏鉄は正月四日に着陣、細川勢二万三千五百、黒田勢一万八千、小笠原勢六千なども続々と着到、鍋島、立花、有馬、寺沢の諸勢もそれぞれ増強して総勢十二万四千余人の大軍が原城を蟻の這い出る隙もないほど包囲しました。

これに対して一揆勢は老若男女三万七千、勝敗は既に明らかでした。

信綱は巡見の後、諸将を集めて今までの力攻めと抜け駆けを厳しく批判、徹底した持久戦と兵糧攻めを命じました。加えて城兵の士気を沮喪させるため、攻城軍の各陣に井楼せいろう(やぐら)を組み立て、大筒、鉄砲で城内を狙い射たせました。

更に平戸からオランダ船を呼び寄せ、城内を砲撃させました。オランダ船を見て援軍到着と喜んでいた一揆勢はその船が城内を砲撃するのを見て衝撃を受けました。

一月十三日、城中から寄せ手に矢文が送られ、宗門を守るため立上ったのに外国の助けまで借りるとは何事かと責めました。幕府軍の中にも批判の声が上り、一月二十八日、オランダ船は平戸へ返されました。

この間の二十二日、佐賀藩からの砲弾が本丸で碁をうっていた天草四郎の左の袖をかすめ、側にいた男女五、六人が死にました。このことで四郎に対する絶対的な信仰が揺ぎ始め、城から逃亡する者が出始めました。

寄せ手は坑道を掘って城内に攻め入る策を立てましたが、察知され失敗しました。

この頃山田右衛門作はどうしていたのでしょうか。本丸の守備隊長の一人として陣中旗を掲げ、四郎の陣中見廻りの供をしているのを見たという記録もあります。別の資料でも右衛門作は益田甚兵衛らとともに本丸で二千人を率いていたとされ、四郎の信頼も厚かったと思われまます。

しかし一方では一月中旬、右衛門作の名で「四郎時貞以下の逆盗を誅伐して天下泰平を致さん」との矢文ありとの記録もあります。

注目すべきは二月一日、右衛門作の旧主、有馬直純から天草四郎、山田右衛門作ら宛に



矢文が送られ、これに応じて右衛門作と蘆塚忠右衛門が二月三日、大江の浜で直純の臣、有馬五郎左衛門と矢留（休戦）の上、丸腰で会談したことです（図2「原城絵図」の右下にこの会談場所が書き込まれています）。会談の内容は不明ですが、同じ頃四郎の妹や甥が城内へ遣わされていますので、恐らく降伏の勧告であったと思われるます。

二月十日城中では太鼓を鳴らして「有難の利生や、伴天連様の御蔭で、寄せ衆の頭をずんとキリシタン」と歌い踊るのが聞えました。この日は聖母マリヤの受胎告知日でした。

もう誰の目にも最後の時が近づいていることは明らかでした。城方は寄手の油断を見ずまして夜討ちをかけ、兵糧、弾薬などを奪い取る捨て身の作戦を立て、二月二十一日、朧月も雲に隠れた夜の闇に乗じて鍋島、黒田、寺沢の陣をめざして城兵五千がどつと打って出ました。井楼、陣小屋、竹東などに火を放ち敵陣深く攻め入りました。黒田勢では三度にわたる攻防の末、家老の黒田監物が戦死するほどの激戦となりました。寺沢の陣にも一揆勢が激しく攻めかかりましたが、天草で戦死した三宅藤兵衛の子、藤右衛門が自ら長刀を取って勇戦し、三方所の手傷を負いながら敵四、五人を斬り伏せ、劣勢を盛り返して撃退しました。天草合戦での恥辱をここに雪いで「侍の冥加」と称えられました。

一揆勢の討死二百九十二人、幕府軍討死七十五人と夜討ちは失敗でした。松平信綱は城方の戦死者の腹を割かせてみると胃の中は青草ばかりでしたので城中の兵糧が尽きたこと

を知り、いよいよ総攻めを決意しました

この間に山田右衛門作の身に大変なことが起っていました。右衛門作は十八日に旧主有馬の陣に矢文を射て「城中には心ならずも籠城した者もいるので、総攻めの日時をあらかじめ知らせて頂けば、私の手の者に城中の小屋などすべてに放火させ、私は四郎時貞を船で落ち延びさせる形にして生け捕って差し上げましょう」と誓紙を差し出しました。

ところがこの矢文の発見が遅れ、寄せ手からは二十日になって遅延の詫言とともに総攻めの手筈や合図を定め城中に射返しました。何とこの矢文は右衛門作の手に届かず、城中夜廻りの者に拾われ、四郎時貞に露見してしまいました。

四郎は驚き怒り、右衛門作を捕え、手枷てかせ・足枷あしかせを厳しくして大江の狭い牢に閉じ込め、妻や子を見せしめに処刑しました。右衛門作を生かしておいたのは城外への通信をさせ、敵を欺く手段を残しておくためでした。

## 落城

江戸からは松平信綱の許に城攻めを急ぐようにとの再三の命令が下されていきました。二月二十三日に予定していた総攻撃は大雨のため二十六日に延期、なお雨が止まないため

二十八日に再延期されました。

この時鍋島勢は城の北西に突出している出丸の攻撃を命じられていましたが、二十七日昼、試みに火矢を射たところ、城内が応戦してきたため急遽出丸に攻めかかりました。この動きを見た諸将は鍋島の抜け駆けかと怒り、一斉に攻撃を開始しました。

城方は二十一日の夜襲で弾薬二箱を奪っただけで、兵糧、武器は奪えず、飢えと疲労で弱っていましたので、鍋島勢は瞬く間に出丸を攻略し、二の丸を攻め始めました。

この時、鍋島勢の軍目付をしていた長崎奉行榊原職直の子、職信が若気の至りで五、六人の兵を率いて二の丸の堀に上り「原の城の一番乗り」と叫びました。やむなく父職直もどつと攻めかかりましたので、鍋島勢は「軍監殿を討たすな」と二の丸に殺到しました。

同時に大手口の細川勢の大軍は三の丸に攻め入り、たちまちこれを攻略して本丸と三の丸の間にある二の丸に攻め込みました。

二の丸のすぐ上の本丸をめざして諸將競って猛攻を始めた時、老将水野勝成の孫勝貞と有馬直純の子康純がほとんど同時に本丸に攻込んで旗印を立て、我こそが一番乗りと激しく争いましたので、信綱は喧嘩両成敗と二人とも後陣に下げてしまいました。細川勢、鍋島勢も本丸の一部を占領しましたが、日も暮れてきたのでこの日の戦は終わりました。

明るる二十八日寅とらの刻、今まで最右翼の大江口で満を持していた黒田勢一万八千は天草

丸から本丸の石垣をよじ上り攻めかかりました。城中からは大石、大木を投げ落とし、多くの死傷者が出ましたが、この時全軍が鬨こゑの声をあげて総攻撃をかけ、細川勢が火矢数百本を射込んだので四郎の陣屋は炎上し、黒煙は天を覆いました。諸勢は先を争って本丸に攻め込みます。父の弔い合戦を望んだ板倉重矩は細川勢の好意で最前線に出て、自ら槍を取って奮戦しました。

城中からは大石、大木がなくなると古苦、筵にまで火をつけて投げ、最後は鍋、釜まで投げつけて抵抗し、二度にわたり押し返しましたが、戦いはそれまででした。一人も生かして残すなどという下知に、百姓はもちろん、女子供に至るまで一人残らず殺されてゆきました。もはや戦いでなく、虐殺でした。

天草四郎時貞は細川勢の陣野佐左衛門に討ち取られました。陣中旗は鍋島大膳が分捕りました。

一揆勢三万七千は皆殺しにされたと伝えられますが、密かに逃亡する者も続出し、総攻めの前には二万五千位になっていたという説もあります。戦死者の死体は一揆勢が砲撃を避けるため地下に作った住居を掘り返して埋められましたが、最近の発掘で無数の人骨が出てきて、中には明らかに女・子供の骨もあって哀れを誘いました。弾丸を打ち延して作ったと思われる多数の鉛の十字架も出てきましたが、一つ黄金の十字架もありました。

落城の日、松平信綱は城中を探させ、大江口の牢に閉じ込められていた山田右衛門作を発見しました。引き出された右衛門作と対面した信綱は、何とか乱を終らせようと苦しんだ右衛門作の命は助けようと思いました。

### その後の山田右衛門作

救出された時弱り切っていた右衛門作は信綱の保護の下に長い取調べを受けました。その供述書である『山田右衛門作口書写』は各藩からの上申書が自藩の功績を強調して書かれている中で、この乱の実情を忠実に伝えているという点で貴重な資料となっています。

正しい記録を後世に残したいと思つた信綱が右衛門作の命を助けたと考えられますが、裏切り発覚の時、四郎らが右衛門作をすぐに殺さなかつたのも、一揆勢も同じ思いをもっていたからかも知れません。

三月一日、信綱は原城の破却を命じました。諸将も続々と引き揚げ始めた三月二日、右衛門作は有馬直純の陣で有馬五郎左衛門と会いました。二月の和平交渉がうまく進んでおれば改宗した者たちだけでもと助けられたのにと二人は残念であつたに違いありません。島原では一人残らず一揆に参加した村もあり、乱平定後も田畑が荒廃しましたので、

他藩の領地から農民を強制移住させたといわれています。右衛門作のいた口之津もその一つで、心ならずも一揆に参加し、死んで行った老若男女を思うと、生き残った右衛門作はどんなにか辛かったことでしょう。

領主への処分は唐津藩寺沢堅高が四月十二日、天草四万石を召上げられ、この処分を不服とした堅高は江戸の海禅寺に入って自害しましたので家は断絶しました。島原藩松倉勝家は所領没収の上、斬罪となりました。一揆勢の無念も少しは晴れたでしょう。

ついでながら二月二十七日に結果的に抜け駆けした鍋島勝茂父子と榊原職直父子は六月二十九日、閉門蟄居を申し渡されました。

松平信綱は山田右衛門作が油絵をよくすることを知って気に入ったのでしようか、島原、天草の戦後処理を終えて江戸へ帰る時一緒に連れて帰り、五月十二日、江戸に着きました。同志を裏切り、妻子を殺され、一人生き残った六十六歳の右衛門作にとっては、心身ともに辛い旅であったことでしょう。

右衛門作は松平信綱の屋敷に住み、自由に絵を描いていたようです。たまたま江戸市中に放火による火災が頻発しましたので、信綱は犯人が処刑される時の苦悶の表情を右衛門作に描かせ、江戸の市中に張り出したところ、放火はびたりと止んだといわれています。

乱のあとも天草、島原をはじめ各地で厳しいキリシタンの詮議があり、キリストやマリ

アを描いた油絵が踏絵に使われたという記録がありますが、右衛門作の描いた絵であったかも知れません。もしそうだとしたら右衛門作はどんな思いだったのでしょうか。

自分の描いた絵の出来栄えがよければよいほど信者はその尊さに打たれて踏むのをためらい、処刑されてしまうでしょう。——いかに尊い画像とはいえ所詮は画なのだ。その画を踏んでさえくれれば生命は助かるのに——と右衛門作は思っていたかもしれない。

乱の起るちょうど四年前の寛永十年（一六三三）、イエズス会の日本での管区長であったフェレイラが長崎で捕えられ、穴の中で逆さ吊るしの拷問にかけられて五時間後に苦痛に堪えかねて棄教、日本に帰化して沢野忠庵となり宗門改に協力しました。偉い宣教師様でも転ぶのだと知って棄教して生き延びた人と、天正遣欧使節団の一人で、フェレイラと同じ日に穴吊るしの拷問にかけられ「我はローマを見しジュリアンなり」と叫んで死んだ中浦ジュリアンと、どちらが神の御心に叶うのでしょうか。

山田右衛門作はその後松平信綱の許しをえて島原に帰り、島原半島の先端の口之津で八十三歳でなくなつたと伝えられています。

山田右衛門作は本当の意味のキリシタンではなかったかも知れません。右衛門作は転ぶ者は地獄へ墜ちるといふ宣教師の言葉を信じて踏絵を拒み、恐しい拷問に堪えて死んで

行つた何百、何千、何万の人々を目のあたりにした時、キリシタンの教えは今のこの世で果して人々を幸せにするものであるうかという疑問を持ったことでしょう。誰がこの疑問に答えることができるのでしょうか。

沢野忠庵となつたフェレイラは一つの答を出しました。しかし彼は役人にも、妻子にすらも覗かせなかつた心の奥の奥では信仰を捨てていながつたのではないのでしょうか。

原城跡に立つと南国の空は白雲を点じてあくまでも青く、白波の寄せる紺碧の有明海も、白い断崖も、緑の森も、三百数十年前と変らぬ景色が残されています。うらうらと照る日も、吹くそよ風も、囀る小鳥の声も心地よく、ここであの凄惨な戦いが繰り広げられたとはとても思えません。

巨大な墓と化した原城跡には、ばらばらになつた幾万の人々の骨が今も眠っていて、誰も答えない出せない無言の問いを問い続けているのです。

(元・石原産業(株)常務取締役)

(平成二十年六月、三高同窓会「大阪舎密クラブ」での講話に資料追加、補筆)